



女三代、愛と自由を求めて

松本 侑壬子・ジャーナリスト

1950年代の主婦だった祖母、いま働き盛りの開業医である母親、そして結婚をためらうキャリアウーマンの娘。それぞれに愛の悩みを抱えながら懸命に生きる女三代の物語。とりわけ、自身の母親とも娘とも素直に向きあえない女医の複雑な心の闇を、60歳代になったカトリーヌ・ドヌーヴが陰影深く演じて新境地を見せる。

南フランスの片田舎。カナダから休暇で戻ったオドレイ（マリナ・ハンズ）は、優しい父親と対照的に母親マルティーヌ（ドヌーヴ）とはなぜか話がごちない。2週間の滞在をと、祖父母の遺した海辺の家にやって来たオドレイは、台所の引き出しの奥に祖母ルイズ（マリ＝ジョゼ・クロース）の日記帳を見つける。そこには、料理のレシピやこまごまとした生活の記録と共に、子どもたちを愛しながらも単によき妻、よき母としてのみ生きる苦悩と自由な生活への憧れが切々とつづられていた。

隣人の老婦人から祖母ルイズについて、美人で“玉の輿”結婚と評判だったこと、“語学の勉強”にバスで街へ出かける姿が噂の種になったこと、いつの間にか姿が見えなくなったことなどを教えてもらう。母マルティーヌからはただ「50年前にまだ幼い自分と弟を残して家出をした冷たい母」としか聞かされていなかったのだ。なぜ、祖母は家出をしたのか、なぜ母は祖

母について何も語ろうとしないのか。祖母の思い出につながるものは、何1つ残っていない。

オドレイ自身も秘かな悩みを抱えていた。カナダで恋人ではない男性との間に宿した3ヵ月の赤ん坊を生む決心がつかないのだ。仕事は続けたい、結婚は二人とも向いていない。一人で子どもを生み育てる決心がつかないのは、子どもを愛せるかどうか自信がないからだ。母親からの柔らかな愛情で包まれた記憶がない。母はいつも強く厳しく正しいが、甘えたり安らいだりできる相手ではなかった。自分も仕事を続けながら心から愛情を注げるか、子どもを一人で幸せにすることができるのか…。砂浜に寝転び、海風に吹かれながら、オドレイは一人思い悩む。

そして、亡母ルイズの希望を背負って医師として成功したマルティーヌにも、深い心の傷があった。ルイズの“失踪”の秘密を実は知っていたのではないか、と思えるフシさえあるのだ。すべてが痛ましい悲劇として明るみに出たとき、マルティーヌとオドレイは、母と娘として初めて心を開いて向きあう…。

青い海、砂色の浜辺、ちょっと風変わりな白い壁の家。あめ色の表紙の分厚い日記帳を通して、三世代の女たちがそれぞれに人生の断片から愛の意味を発見していく。個人としての自由への渴望が女性解放運動となって発火する直前の時代のルイズ。自由を得ながらなお心の空洞を満たせぬマルティーヌ。教育も自由も与えられながら、自分の居場所も未来への展望もつかめず、混沌の底に沈みそうなオドレイ。

エレガントで窮屈そうな50年代のドレス、堂々たるプロフェッショナルなスーツ姿、そしてだらりと長い上着にぶかぶかのパンツルック。三人三様のスタイルが、「ファッションは時代と生き方の表現」であることを実感させる。

『隠された日記 ～母たち、娘たち～』

仏・カナダ合作映画（104分）／監督ジュリー・ロベス＝クルヴァル

銀座テアトルシネマほか全国順次公開

©2009 Sombrero Films-France 3 Cinema-Filmo

